慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「長期の18世紀」イングランドにおける都市成長について
Sub Title	Urban growth in long eighteenth century England
Author	酒田, 利夫(Sakata, Toshio)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2000
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.93, No.3 (2000. 10) ,p.631(119)- 646(134)
JaLC DOI	10.14991/001.20001001-0119
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20001001-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」93巻3号（2000年10月）

研究ノート

「長期の18世紀」イングランドにおける都市成長について

酒　田　利　夫

はじめに

2000年3月14日に開かれた慶應義塾大学経済学部研究教育資金による共同研究「経済史における都市盛衰の比較研究」研究会において，分担研究者の一人であるレスター大学P. クラーク教授（1998年度経済学部招聘教授）は，「中世以降におけるヨーロッパの都市」と題する報告を行い，古代ローマ時代以降のヨーロッパにおける都市盛衰のクロノロジイを明らかにした。すなわち，2世紀に頂点に達した古代ローマ都市システムが5世紀に崩壊した後，9－10世紀に古代都市の復活を含む中世における第1の都市化の波が起こり，続いて第2の波が11－14世紀に押し寄せた後，14世紀後半－15世紀には都市化の後退がみられたこと。そして，16－17世紀には近世における都市化の復活がみられたが，続く「長期の18世紀」（the long eighteenth century）においては新たな都市停滞が起こり，19世紀－20世紀半に都市化の盛期を迎えたということである。(1)

しかしながら，同時にクラーク教授は，「長期の18世紀」イングランドおける例外的な都市成長を指摘されたのであり，本稿は，今回の報告においては詳論されなかった当該期イングランドにおける都市成長，特に小都市の成長について，研究史のサーヴェイに基づき，同教授の研究および極めて注目されるストバートの研究によりつつ，検討を加えんとするものである。(2)

（1）　Clark (2000). 本稿は，2000年5月12日に大阪ガーデンパレスで開かれた第16回「イギリス都市・農村共同体研究会」における報告の一部に加筆したものであり，同年8月11日に千里ライフセンターで開かれた第11回「地域工業化研究会」における報告の一部として発表された。その際貴重なコメントを頂いた会員の方々に記して厚くお礼申し上げる。また本稿は，慶應義塾大学経済学部研究教育資金研究助成による共同研究「経済史における都市盛衰の比較研究」における筆者の分担研究成果の一部である。

I

クラーク教授を中心とする小都市研究プロジェクトにより収集された小都市人口史料に基づく，同教授による近世イングランドにおける小都市の人口趨勢に関する研究についてはすでに紹介したが，問題の「長期の18世紀」イングランドにおける小都市の人口趨勢について煩を厭わず繰り返しみておこう。(3)

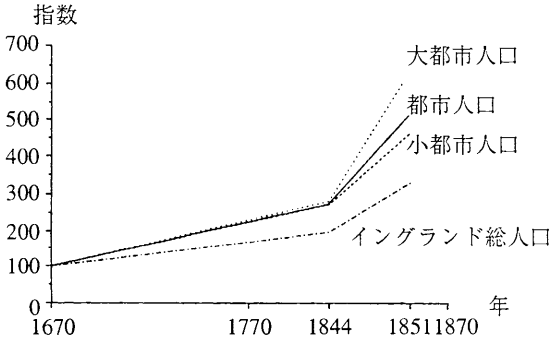
当該期の小都市人口史料として用いられるのは，1670年頃については1660年代の炉税記録（the hearth tax returns）および1676年のコムトン・センサス（the Compton cencus）とよばれる聖餐受拝者調査記録，1811年についてはより信頼しうる第2回全国センサス（the second national census）であり，583小都市に関するデータが得られるのである。(4)

以上の史料より作成された表1および図1によれば，前述の如く，これまで一般的に受

表1　1670年頃～1811年におけるイングランド地方都市の人口趨勢(5)

	都市数	人口増加率（年率%）
小都市	583	0.70
大都市	30	0.75
都市	613	0.72

図1　1670～1851年におけるイングランド地方都市の人口趨勢(6)



（2）「長期の18世紀」ヨーロッパにおける都市化の後退（de-urbanization）については，カリフォルニア大学のJ. ド・フリース教授によって，またイングランドにおける都市化の進展についてはケンブリッジ大学のE. A. リグリィ教授によって，すでに各々指摘されているが，両者が対象としたのは人口5千人以上の都市であり，ここではより小規模な都市をも含めて検討を行いたい。de-Vries（1984）；Wrigley（1985/87）；酒田（1994），第5章.

（3）酒田（1999a）；（1999b）.

（4）ここで小都市とは，1660－70年代に人口400－2,500人を数えた定住地および1811年の第2回全国センサスにおける人口1,000－5,000人の定住地のことである。Clark（1991），p.68；（1995b），p.94.

（5）Clark（1995b），p.99, Table 5.2；酒田（1999a），表2より.

（6）Clark（1995b），p.99, Figure 5.1；酒田（1999a），図2より. 但し，イングランド総人口は，Wrigley & Schofield (1981) による。

け入れられてきた「長期の18世紀」イングランドにおける小都市の衰退について疑問が生じるといえよう。むしろ，当該期イングランドにおいて小都市は，大都市と同様に全国人口を上回る人口増加率を示したのである。

こうした小都市の成長の決定的要因としてクラーク博士が指摘するのは，大都市の場合と同様に，経済特化の進展である。すなわち，多くの小都市が，時に大都市とダイナミックな関係を有しつつ，工業特化を進展させた。例えば，テュークスベリ（Tewkesbury）およびヒンクリィ（Hinckley）の靴下編業，オウルニィ（Olney）およびウェリンバラ（Wellingborough）のレース編業，ルートン（Luton）およびダンスタブル（Dunstable）の帽子製造業，ウィトニィ（Witney）の毛布製造業，バーフォード（Burford）の鞍製造業，ハイ・ワイコム（High Wycombe）の椅子製造業，ウッドストック（Woodstock）の鋏製造業，シェフィールド（Sheffield）の刃物製造業等である。また，多くの小都市が，レジャー都市ないしリゾート都市として発展をみたのであり，そうした例として，リッチフィールド（Lichfield），スタムフォード（Stamford），チチェスター（Chichester），チェルトナム（Cheltenham），バクストン（Buxton），ウェイマス（Weymouth），スカーバラ（Scarborogh）等の都市を挙げることができる。もちろん，多くの小都市は，また周辺農村工業の流通・企業中心地になる等，商業中心地として発展を示したのである。(7)

こうして，ジョージ王朝期には大多数の小都市が，あきらかに繁栄を享受したのであり，また農業関連職の顕著な後退によって，ますます都市的経済の進展がみられたのである。しかしながら，17世紀における小都市の約5分の1（18.8パーセント）が1811年において人口1,000人のレベルに達せず，かなりの小都市が消滅しているのであり，「長期の18世紀」については多様な地域的相違がみられたのである。(8)

II

前節において「長期の18世紀」イングランドにおける小都市の全国的な趨勢についてみたが，本節においては，当該期におけるその地域的多様性について，これもクラーク教授の研究によりながら，イングランドをイングランド北部，イースト・アングリア地方，ミッドランド地方東部，同西部，ホーム・カウンティーズ，イングランド南部および同西部の7地域に区分して，検討を加えたい。(9)

「長期の18世紀」における小都市の地域的趨勢については，表2～表4によって知られる。まず表2に示されるように，当該期を通じて，小都市の衰退が多く見られたのは，イングランド北部（32.0%）およびイースト・アングリア地方（29.8%）であった。但し，前者において小都市の衰退が顕著であったの

（7） Clark (1995b), p.100；酒田（1999a），249-50頁.
（8） Clark (1995b), p.101；酒田（1999a），250頁.

表 2　1660年代～1811年頃間の各地域における小都市の衰退[10]

	平均衰退率(%)
イングランド北部	32.0
イースト・アングリア地方	29.8
イングランド西部	23.9
ミッドランド地方東部	21.9
イングランド南部	21.0
ホーム・カウンティーズ	19.5
ミッドランド地方西部	17.3

表 3　各地域における大都市[11]

	(1)	(2)
イングランド北部	9	29
ミッドランド地方西部	10	15
ホーム・カウンティーズ	6	10
イングランド南部	6	5
イングランド西部	4	5
ミッドランド地方東部	3	5
イースト・アングリア地方	6	0

(1) 17 世紀における人口 2,500 人以上の大都市数
(2) 1811 年に人口 5,000 人以上となった 17 世紀の小都市数

表 4　1811年の各地域における新都市[12]

	人口 5 千人未満	5 千人以上
イングランド北部	32	10
ホーム・カウンティーズ	29	7
ミッドランド地方西部	14	7
イングランド南部	13	2
イングランド西部	12	0
ミッドランド地方東部	6	0
イースト・アングリア地方	6	0

(9) クラーク教授の最近の研究（Clark 1995b）と先の研究（Clark 1991）とでは，若干異なる 7 地域区分が行われているが，その主要な相違は，前者においては後者のイングランド北部からヨークシャが分離され独立した地域とされたこと，および後者のホーム・カウンティーズ，イングランド西部および同南部の 3 地域が，イングランド南西部および同南東部の 2 地域に区分された点である。しかしながら，以下にみられるように，イングランド南西部は，ほぼ先のイングランド西部を意味し，またホーム・カウンティーズは，すべてイングランド南東部に含まれており，地域的考察を行ううえで，さしたる支障はない。

(10) Clark (1991), p.69, Table 1；酒田（1999b），表 4 より．

(11) Clark (1991), p.70, Table 2；酒田（1999b），表 5 より．

(12) Clark (1991), p.71, Table 3；酒田（1999b），表 6 より．

は，大規模な工業化の影響がみられなかったカンバーランド，ウェストモーランドおよびヨークシャのイースト・ライディングであり，織物工業の繁栄をみたランカシャおよびヨークシャのウェスト・ライディングにおいては，衰退せる小都市は少なかった。他方，工業化の挫折（de-indusrialization）がみられたイースト・アングリア地方においては，小都市の衰退は最も顕著であり，表3に示されるように当該期に大都市にまで発展をみせた小都市は皆無で，表4のように新たに小都市に上昇した都市数も6都市と最少であった。

表3に示されるように，1811年までに人口5,000人を越える大都市に発展した小都市の数が多かったのは，イングランド北部（29都市），ミッドランド地方西部（15都市），およびイングランド南東部のホーム・カウンティーズ（10都市）である。特に，1800年までに工業化したイングランド北部においては小都市の5分の1，なかでもダラムにおいては17世紀における小都市の30%が，大都市にまで発展をみたのであり，その比率が12.4%と低めであったミッドランド地方西部においても，ウースターシャおよびスタッフォードッシャでは各々27.3%および20.0%と高かった。

また，表4にみられるように，新都市の出現もイングランド北部において最も多く（大小合わせて42都市），19世紀初頭における小都市の4分の1近くが新都市であり，とりわけ重要な石炭業地域であったダラムにおいては，1811年における小都市の3分の1が，また重要な毛織物工業地域であったヨークシャのウェスト・ライディングにおいては，小都市の半数以上が新都市であった。これに対して，ミッドランド地方西部においては，1811年における小都市に占める新都市の比率はイングランド北部ほど高くはなかったが，新都市が1811年までに大都市に発展した比率は高かった。ホーム・カウンティーズにおいても，新都市の比率は高かったが，とりわけ1811年における都市ネットワークに占める新都市の比率が，29.9%と極めて高かったことが指摘されている。但し，イングランド北部およびミッドランド地方西部における小都市の発展の要因が，工業化であったのに対して，ホーム・カウンティーズにおけるそれは，首都ロンドンの発展に伴う衛星都市およびナポレオン戦争によるケント北部の造船都市の発展によるものであった。(13)

かくして，「長期の18世紀」イングランドにおいては，都市ネットワークのかなりの再編が行われたのであり，17世紀における小都市の4分の1が衰退し，3分の1から4分の1が繁栄を示し，かなりの新都市の出現をみたのであるが，そうした小都市の盛衰はイングランド北部において最も顕著であり，イースト・アングリア地方においては小都市の衰退が，そしてミッドランド地方西部およびホーム・カウンティーズにおいてはその発展が顕著であったということができよう。(14)

---

(13) Clarkson (1985) ; pp.34, 37-8 ; Clark (1991), pp.69-71 ; 酒田（1999b），190-3頁.

(14) Clark (1991), pp.69-72 ; 酒田（1999b），193頁.

III

「長期の18世紀」における小都市の衰退が顕著であったイースト・アングリア地方，他方，小都市の発展が顕著であったミッドランド地方西部およびイングランド南東部のホーム・カウンティーズについては，同じくクラーク教授の研究によりつつ，すでに各地域を代表する，サフォーク，スタッフォードシャおよびサリィの各州をとりあげ，小都市人口の趨勢とその要因についてより詳細な検討を加えたが，盛衰の最も顕著であったイングランド北部については，そうした検討をなしえなかった。[15] しかしながら，その後ストバート博士が当該期イングランド北西部における小都市を含む都市成長について極めて興味深い研究を発表しており，本節では当該研究によりつつイングランド北部における小都市を含む都市人口の趨勢について検討を加えたい。

i

ここでイングランド北西部とは，ランカシャおよびチェシャの2州を指しているが，当該地域，特にランカシャ南部およびチェシャ北部地域は，産業革命の中心地域であるとともに，大規模運河建設が行われた最初の地域であり，チューダー朝期に散在した小都市から発達した都市システムを有した地域であった。[16]

次に，ここで都市とは，小都市をも含めるべくコーフィールド教授の示唆に従い，4人の同時代人によって「市場町」(market town) とよばれた定住地であり，少なくともその内の1人によってその地位を与えられた都市は35都市を数えるが，当該期間を通じて「市場町」と認識されているのは30都市（後出表6参照）であり，村落との境界にあった最下層の2都市（Eccleston および Tarvin）は，18世紀半までには村落に戻ってしまい，また3都市（Ashton-under-Lyne, Oldham および St Helens）は，18世紀の最後の20－30年間に「市場町」の地位に達した新興都市であった。[17]

ここでは以下の3史料，すなわち，1660年代の炉税記録（the hearth tax），1770年代の地方センサス（local censuses）および1801年の第1回全国センサス（the first national census）を用いて，3時点における都市人口の推計がなされる。[18]

以上の3史料により作成された表5からは，1664－1801年間における当該地域における都市人口の急速な増加が明らかである。すなわち，まず当該地域の総人口は，1664－1778年

---

(15) 酒田（1999b）第IV節.

(16) Stobart (1996), pp.28-9.

(17) 4人の同時代人とは，R.ブルーム（Blome, *Britannia*, 1673），J.アダムズ（Adams, *Index Villaris*, 1690），T.コックス（Cox, *Magna Britannia et Hibernia*, 1731）および D.&S.ライソンズ（Lysons, *Magna Britannia*, 1810）である。尚，著書の出版地は，すべてロンドンである。Stobart (1996), p.29, n.16.

表5　イングランド北西部の人口[19]

	人口（人）			人口増加率（%）		
	1664	1778	1801			
	(1)	(2)	(3)	(1)－(2)	(2)－(3)	(1)－(3)
地域総人口	200,000	495,000	798,874	148	61	279
都市人口	41,506	143,349	308,483	245	115	643
農村人口	158,494	351,651	490,391	122	39	209
都市人口比率（%）	21	29	39			
都市人口の中位置	1,384	4,778	10,283			
人口5千人～1万人の都市	1	4	3			
1万人～5万人	0	3	7			
5万人以上	0	0	2			

間に20万人から49万5千人と約2.5倍の増加を，さらに1801年までには約80万人と約4倍の増加を示したのに対して，都市人口は，同年間に41,506人（都市人口比率21パーセント）から143,349人（同29パーセント）と3.5倍の増加を示し，さらに1801年までには308,483人（同39パーセント）と約7倍強の増加を示したのである。そして，1664年における都市人口の中位値は1,348人にすぎず，人口5千人を超える都市はチェスター1都市のみであったのに対して，1778年には同中位値は4,778人と同じく3.5倍の増加を示し，人口5千人以上の都市も7都市（後出表7参照）に増加し，さらに1801年には同中位値は1万人を超え，人口5千人以上の都市も12都市を数えるにいたり，その内の2都市（リヴァプールとマンチェスター）は，人口5万人を超えるにいたったのである。[20]

ii

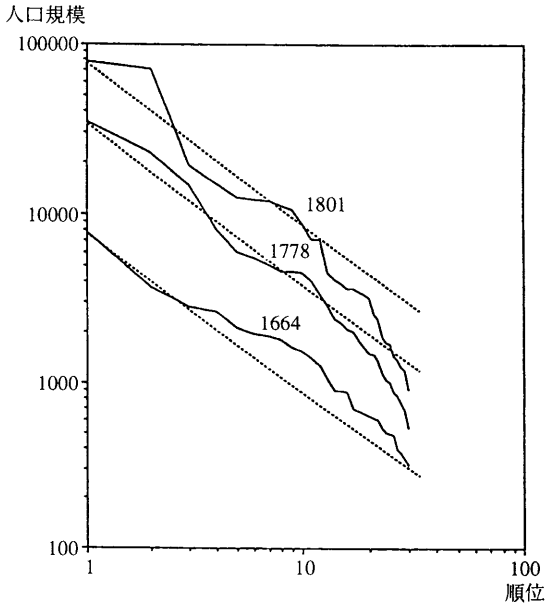
上にみた都市成長について，図2の順位・規模分布によって，その特徴をみるならば，まず，1664年については大・小都市の人口規模と比較して中都市の人口規模が相対的に大きい分布（convexity）が明らかであり，1778年については大・中都市人口規模に凹凸のあること，および小都市の人口規模の落ち込みを示す分布が明らかとなり，さらに1801

(18)　炉税は，王政復古後に議会が課したもので，炉1基につき年2シリングが課税されたのであり，2回に分けて（ミクルマスとレディ・デイに）1シリングずつ納付された。ここでは，1664年のレディ・デイの徴税記録が利用されるが，その理由は，公認免税者（教会税および救貧税ともに支払えない者および20ポンド以下の財産保有者）が記載された最初の記録であると同時に，当該記録のみが他の記録のように査定記録と徴税記録を合わせたものではないからである。但し，チェスターについてのみは，より詳細な記録である1665年のレディ・デイの記録が用いられる。かくして，1664年については，30都市の人口数が，ウォールの平均世帯規模4.54人（1691－1700年）を乗数として得られるのである。Arkell (1983) ; Wall (1972), p. 192 ; Stobart (1996), pp.30-32. また，1778年の人口数は，主として地方センサスおよび司教の巡察記録（Bishop's Visitation）に含まれる世帯数に基づいて得られており，ここでも平均世帯規模4.5人という乗数が採用される。Stobart (1996), pp.30-4.

(19)　Stobart (1996), p.36, Table 1より．

(20)　Stobart (1996), p.35.

図2　イングランド北西部における都市の順位・規模分布[21]



年については2大都市の強力な成長とその他の中・小都市の人口規模の落ち込み，特に小都市の顕著な落ち込みが明らかである。ジョンソンによれば，1664年の如き大・小都市の人口規模と比較して中都市の人口規模が相対的に大きい分布は都市統合の低水準を意味し，したがって，その後退は都市システムにおける統合の進展を意味するものであり，その結果として特定の中心地（ここではリヴァプールとマンチェスター）の成長があるとされ，かつ大都市の累積的成長というロブソン・モデルに適合的にもみえる。[22]

しかしながら，表6および表7から，この時期の都市の順位と規模についてより詳細にみるならば，より興味深いファインディングズが得られる。まず表6から，1664－1801年間における順位の激しい変動，特に1664－1778年間における顕著な変動が明らかとなる。すなわち，1664年および1801年の両年において同一順位を占めたのはマンチェスターとプレストンの2都市（各2位および7位）のみであり，7都市が1－2位の，4都市が3－4位の順位変動を示し，8都市が5－6位の，さらに9都市が7－8位の順位変動を示したのである。そして，こうした激しい順位の変動は，人口増加率の大きな差を反映するものである。すなわち，表7のように，1664－1801年間に7都市は200パーセント未満の増加にとどまり，8都市は200－500パーセントの増加であったが，500－1000パーセントの増加率を示した都市は7都市を数え，さらに4都市は1000パート以上の増加率を示したのである。その中でも最も顕著であったのは，一方における全国的にも重要な海港としてのリヴァプールの勃興（12位－1位－1位）と，他方におけるナンウィッチおよびコングルトンの衰退（各3位－12位－18位および6位－14位－15位）であった。しかし，同時にめざましかったのは，バーンリィ，ハスリングデンおよびプレスコットの小都市から重要工業都市への上昇（各28位－26位－19位，23位－20位－14位および30位－25位－16位）であり，製塩業のノースウィッチへの移動によるミドルウィッチの没落（20位－23位－29位）であった。[23]

以上のファインディングズは，イングラン

(21)　Stobart (1996), p.37, Figure 1より.
(22)　Johnson (1980); Robson (1973); Stobart (1996), pp.36-7.
(23)　Stobart (1996), p.38.

表6　イングランド北西部における都市の順位，1664～1801年[24]

順位	1664	1778	1801
1	Chester	Liverpool (12)	Liverpool (1)
2	Manchester	Manchester (2)	Manchester (2)
3	Nantwich	Chester (1)	Chester (3)
4	Macclesfield	Warrington (8)	Stockport (8)
5	Wigan	Macclesfield (4)	Bolton (9)
6	Congleton	Preston (7)	Blackburn (10)
7	Preston	Wigan (5)	Preston (6)
8	Warrington	Stockport (11)	Wigan (7)
9	Bolton	Bolton (9)	Warrington (4)
10	Bury	Blackburn (13)	Macclesfield (5)
11	Stockport	Rochdale (14)	Bury (16)
12	Liverpool	Nantwich (3)	Rochdale (11)
13	Blackburn	Colne (15)	Chorley (22)
14	Rochdale	Congleton (6)	Haslingden (20)
15	Colne	Ormskirk (25)	Congleton (14)
16	Knutsford	Bury (10)	Prescot (25)
17	Sandbach	Leigh (26)	Colne (13)
18	Chorley	Knutsford (16)	Nantwich (12)
19	Northwich	Northwich (19)	Burnley (26)
20	Middlewich	Haslingden (23)	Leigh (17)
21	Clitheroe	Sandbach (17)	Ormskirk (15)
22	Altrincham	Chorley (18)	Knutsford (18)
23	Haslingden	Middlewich (20)	Sandbach (27)
24	Malpas	Altrincham (22)	Northwich (19)
25	Ormskirk	Prescot (30)	Altrincham (24)
26	Leigh	Burnley (28)	Newton (28)
27	Newton	Clitheroe (21)	Clitheroe (27)
28	Burnley	Newton (27)	Frodsham (30)
29	Frodsham	Malpas (24)	Middlewich (23)
30	Prescot	Frodsham (29)	Malpas (29)

(注)（　）内は，各々前の年度の順位である。

ド全体についてコーフィールドおよびドーントン両教授によって強調される「選択的成長」(selective growth) を示しているといえよう。すなわち，大都市も小都市も同様に着実で急速な成長を示すなかで，1664－1778年間においては都市ヒエラルキーの上位半分と下位半分に大きな相違がみられ，1801年にかけて大都市の中都市からの乖離がますます進行したことが明らかとなるのである。表6から明らかなように，都市ヒエラルキーの上位半分および下位半分は，各々自己充足的であり，1664－1778年間における両者間の移動は

(24)　Stobart (1996), p.39, Table 2 より．

表7　イングランド北西部における都市人口[25]

都市名	人口（人）			人口増加率（%）		
	1664	1778	1801			
	(1)	(2)	(3)	(1)－(2)	(2)－(3)	(1)－(3)
Altrincham	594	1,029	1,692	73	64	185
Blackburn	1,053	4,500	11,983	327	166	1,038
Bolton	1,615	4,568	12,387	183	171	668
Burnley	373	874	3,304	134	278	786
Bury	1,539	2,090	7,079	36	238	360
Chester	7,817	14,713	19,151	88	30	145
Chorley	670	1,350	4,516	101	235	574
Clitheroe	607	833	1,365	37	64	125
Colne	886	2,880	3,623	205	26	309
Congleton	1,939	2,375	3,861	23	62	99
Frodsham	342	527	1,251	54	137	266
Haslingden	526	1,500	4,039	185	169	668
Knutsford	881	1,767	2,369	101	34	169
Leigh	481	2,000	3,188	315	59	563
Liverpool	1,273	34,407	77,653	2,603	125	6,000
Macclesfield	2,628	6,000	8,743	128	46	233
Malpas	499	678	908	36	34	82
Manchester	3,690	22,481	70,405	509	213	1,808
Middlewich	630	1,131	1,190	80	5	89
Nantwich	2,826	3,325	3,463	18	4	22
Newton	396	751	1,453	90	93	267
Northwich	653	1,620	1,723	148	6	163
Ormskirk	490	2,280	2,554	365	12	421
Prescot	315	993	3,644	215	267	1,057
Preston	1,890	5,500	11,888	191	116	529
Rochdale	891	4,000	7,000	349	75	686
Sandbach	697	1,477	1,844	112	25	164
Stockport	1,386	4,600	14,830	232	222	970
Warrington	1,786	8,100	10,567	354	31	492
Wigan	2,133	5,000	10,989	134	120	415
計	41,506	143,349	308,483			
平均	1,384	4,778	10,283	245	115	643

上昇移動（バリィ）および下降移動（オルムズカーク）が各々1例がみられたのみであった。他方，上位および下位半分各々の内部における変動は激しく，平均順位変動は各々3.7位および3.8位であった。そして，各々の都市の平均成長率は前者359パーセントおよび後者136パーセントと大きな差がみられた。[26] また，急速な成長はヒエラルキー最上位の都

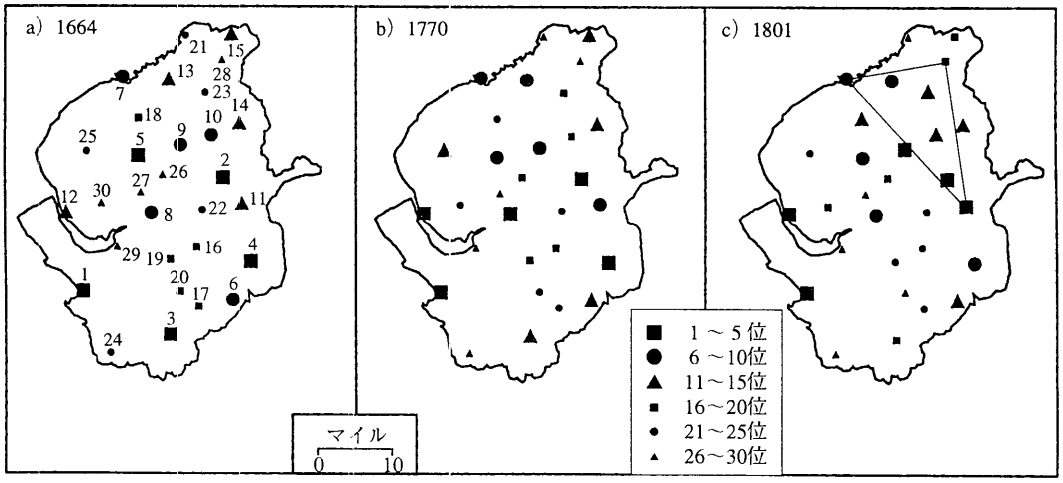
(25)　Stobart (1996), p.40, Table 3 より.

市に集中しているわけではなく上位全般にわたっており，むしろリグリィ教授が指摘するように，急速に成長したのは最大都市ではなく経済特化した幾つかの大都市だったのである。さらに，1778－1801年間における最も顕著な趨勢である大都市の中都市からの乖離については，ヒエラルキー最上位の安定性によって示されるのであり，リヴァプール，マンチェスターおよびチェスターは上位３位の地位を保持し続けたのであり，上位10都市もまた変わらなかったのである。さらに，成長の速度は鈍化したとはいえ，以上の上位10都市と11位以下の都市との間の規模の差はさらに拡大を続けたのであり，前者の成長率は124パーセントであったのに対して，後者のそれは94パーセントにすぎなかったのである。[27]

iii

図３ａに示されるように，1664年において大都市はチェシャおよびランカシャ南央部に分布していた。すなわち，上位10都市の内，４都市がチェシャ南部に，５都市がランカシャ中央部および南東部に分布しており，ランカシャ北東部および南西部には比較的小規模の都市のみしか存在しなかった。しかし，図３ｂおよび表６に示されるように，続く１世紀間に大きな変化がみられた。すなわち，ランカシャ中央部および南東部の工業発展地域への都市の重心移動がみられたのであり，特にチェシャ南部における都市の後退は顕著で

図３　イングランド北西部における都市のヒエラルキー[28]



(注) 但し，地図上の番号は，表６の 1664 年における順位に照応するものであり，地図上の実線とともに筆者が追加した。

(26)　但し，前者の大部分はリヴァプールの急速な発展によるものであり，これを除外するならば198パーセントであった。Stobart (1996), pp.38-9.

(27)　Stobart (1996), pp.39-40.

(28)　Stobart (1996), p.43, Figure 2 より．

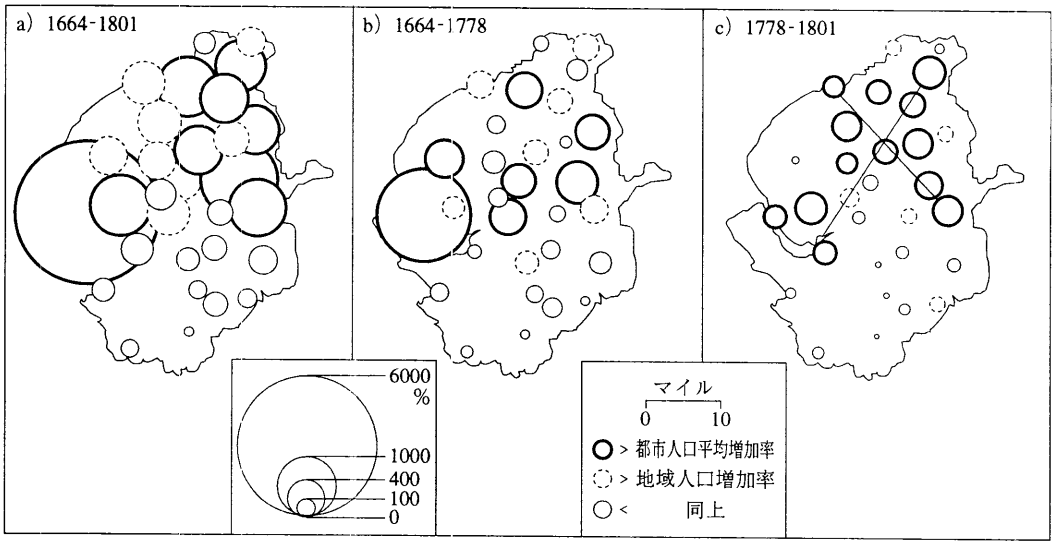
あった。チェシャにおいては，順位上昇都市はランカシャ南東部に接するストックポートのみ（11位－8位，綿織物業による）であり，順位を保持した都市もノースウィッチのみ（製塩業による）にすぎず，他の都市は平均3.7の順位の下降をみたのである。一方，ランカシャにおける変化はより複雑で，順位を上昇させた織物業都市（ブラックバーン13位－10位，コルン15位－13位，ハスリングデン23位－20位，リー26位－17位，およびバーンリィ28位－26位）の近隣に僅かながらも順位を落とした都市（ウィガン5位－7位，クリザル－21位－27位およびニュートン27位－28位）が存在したが，1770年代には，上位10都市の内，チェシャ南部に位置した都市は2都市のみであり，ランカシャ中央部および南東部に4都市（さらにストックポートも加えうる），同北部に2都市，そして同西部にはリヴァプールがその支配を顕示していたのである。(29)

図3cおよび表6に示されるように，こうした変化の趨勢は，1801年まで続いたのであり，チェシャにおいてはストックポート（8－4位）とフロッドシャム（30－28位）の2都市のみが順位を上昇させたのみで，その他の都市は相対的に後退を続けた。他方，ランカシャ東部，特にストックポート，プレストンおよびバーンリィを結ぶ三角形の線に囲まれた綿織物業地域における都市成長は極めて顕著であり，当該地域において順位を下げたのはロッチデール（11－12位）のみで，それも僅か1位の下降に過ぎなかったのに対して，ランカシャの他の地域において順位の上昇を示したのは，プレスコット（25－16位）とニュートン（28－26位）の2都市のみであった。そして，こうしたランカシャ東部の綿織物業地域における集中的な都市成長は，18世紀後半おける新都市アシュトン・アンダー・リンおよびオールダムの急速な勃興によってますます強化された。かくして，1801年にランカシャ南東部には5大都市の内の3都市が位置し，そこにおいて15位以下であったのは1都市（リー）のみであったのに対して，チェシャにおいては，5位以内の都市は1都市（チェスター）のみで，他はすべて20位以下であった。(30)

図4に示される都市人口平均増加率は，以上のような都市変化を確認するうえで重要である。チェシャの都市は，当該期，すなわち「長期の18世紀」を通じて，比較的緩慢な人口増加を示したのであり，当該地域人口増加率および都市人口平均増加率を超える成長を示したのは，ストックポートのみであった。他方，ランカシャにおいては，8都市が地域人口増加率を上回り，さらに8都市が都市人口平均増加率を超える成長を示したのであり，後者の内の6都市は織物業都市であった。しかしながら，1664－1778年間と1778－1801年間の2つの時期では，異なった都市成長パターンがみられた。すなわち，前者の時期においては，図4bに示されるように，次位都

(29) Stobart (1996), p.41.
(30) Stobart (1996), p.42.

図4　イングランド北西部における都市のヒエラルキー：人口増加率[31]



（注）但し，地図上の実線は，筆者が追加した。

市（マンチェスター）の5倍以上の人口増加率を示したリヴァプールの成長が圧倒的であり，急速な成長を示した他の都市はランカシャ全域に広く分散していた。他方，成長が比較的緩慢であった都市は，当該地域全域にみられたとはいえ，チェシャ，特にその西部に集中していたのであり，ストックポートとノースウィッチの2都市のみが地域人口増加率を超えたのみであった。これに対して，図4cに示されるように，急速な都市成長は，後者の時期に，より広範にみられたのであり，都市人口平均増加率を超えた都市は13都市を数え，さらに5都市が地域人口増加率を超えたのである。とはいえ，最も急速な成長をみた都市は，ストックポートからプレストンおよびマージー河口からバーンリィに伸びる2本の垂直線沿いにみられたのであり，その内10都市がランカシャ東部の織物業都市であり，他の都市は，セント・ヘレンズに顕著に示されるように，ランカシャ南西部における鉱山業の発展に関連した都市であった。他方，チェシャにおける都市成長は緩慢で，当該地域人口増加率および都市人口平均増加率を超えたのは，オールトリンチャムとコングルトンおよびストックポートとフロッドシャムの各々2都市のみであり，その中央部においては真の都市衰退がみられたのである。[32]

かくして，18世紀を通じて，イングランド

(31)　Stobart (1996), p.45, Figure 3より.但し，図3cについては，一部（Bolton）修正を加えた。

(32)　ベインズによれば，セント・ヘレンズは，主として石炭業によって，「半世紀のうちに小村落から都市へと勃興」した都市であった。 Baines (1825/68), Vol.2, p.547 ; Stobart (1996), pp.42-4.

北西部における都市的中心地域はチェシャからランカシャへと移ったのであり，そうした変化の趨勢は都市ヒエラルキーの頂点のチェスターからリヴァプールへの交代に象徴されるとはいえ，その基盤には，チェシャの小サーヴィス都市の相対的衰退とランカシャにおける小都市から重要な工業都市への上昇を含む工業都市の著しい成長が存したのである。(33)

結びにかえて

以上，クラーク教授およびストバート博士の研究によりつつ，「長期の18世紀」のイングランドにおける都市成長，特に小都市の成長について考察を行ったが，以下のように総括できよう。

まず，地域差が存するとはいえ，イングランドにおいて「長期の18世紀」が，小都市を含め都市成長の時代であったことが明らかとなったのであり，特にイングランド北西部においてそれは顕著であった。イングランド北西部に関するワーズワースとマンによる周知の古典的地域研究によれば，当該期「ランカシャにおける人口増加は，都市における増加よりも農村における人口稠密化であった」とされてきたが，ここにおけるストバート博士の小都市を含めた都市人口に関するファインディングズは，こうした見解に修正をせまるものであり，当該地域における都市化の進展，および都市システムが少なくとも人口面からみるかぎり18世紀末期において同世紀初頭におけるよりもはるかに重要であったことを示しているのである。そして，そのことは都市経済の強さを示唆しているのであり，ストバート博士も指摘するように，18世紀における工業化の農村工業化的性格は，都市の成長を殆ど阻害しなかったというよりも，むしろ促進したといえよう。(34)

と同時に，「長期の18世紀」は，イングランドにおける都市ヒエラルキーの変化の時代でもあった。そして，重要なことは，「長期の18世紀」における都市成長が顕著であった地域，特にイングランド北西部において，そうした基本的な変化の多くが古典的な産業革命以前に起こっていたことであり，1770年代以降においては，特に都市ヒエラルキー上位において殆ど変化がみられなかったということである。(35)

次に，「長期の18世紀」イングランドにおける都市の急速な成長は，それまでの都市の経済機能とは異なる新しい経済機能に基づくものであったということである。そのことは，イングランド北西部の都市成長のランカシャ東部織物業地域における集中に顕著にみられたのであり，上位6都市は織物業に特化し発展した都市であった。すなわち，ボウルトンおよびブラックバーンは，はじめファスチアン織から後に綿織物業に，マンチェスター，

(33) Stobart (1996), p.44.
(34) Wadsworth and Man (1931/65), p.311 ; Stobart (1996), pp.35-6.
(35) Stobart (1996), p.44.

ストックポートおよびプレストンは，はじめ亜麻織物から後に綿織物業に，そしてマックルフィールドは，絹織物業に，それぞれ特化し発展した都市だったのである。[36] ストバート博士が指摘するように，産業革命以前の18世紀前半に新都市として成長を示した都市は，18世紀第4四半期における地域経済および都市システムにおいて支配的地位を占めつつあったのであり，そうした都市システムが交通・運輸システムおよび工業発展に必要な原材料の供給を促進するとともに，逆に後者が都市システムの編成に大きな影響を及ぼすようになり，経済特化した都市間の新たな相互関係が形成されたと考えられるのである。[37]

最後に，ストバート博士も指摘するように，「長期の18世紀」を通じてイングランドにおける都市システムは変化しつつあったが，都市ヒエラルキーの下位部における変化こそが大都市の発展を支えたのであり，小都市の発展を見落とすならば，当該期におけるイングランドにおける都市変化だけでなく，経済発展をも正しく把握できないであろう。そして，最も重要なことは，上述の如く，かつまたドーントン，コーフィールドおよびクラーク各教授によって示唆されている如く，イングランドにおける工業都市の発展および都市化は「長期の18世紀」前期より開始されていたということであり，工業化と都市化の因果関係については，さらなる検討が要請されているといえよう。[38]

（経済学部教授）

文　献　目　録

Adams, A. & Wrigley, E.A., eds. (1978). *Towns in Societies* (Cambridge).

Alldridge, N. (1983). *The Hearth Tax : Problems and Possibilities* (Hull).

Arkell, T. (1983). 'A Student's Guide to the Hearth Tax', in Alldridge (1983).

Baines, E. (1825/68). *A History, Directory and Gazetteer of the Country Palatine of Lancaster*, 2 Vols. (Newton Abbott ; repr. 1968).

Borsay, P, ed. (1990). *Eighteenth Century Towns, 1688-1820* (London).

Clark, P., ed. (1981). *Country Towns in Pre-Industrial England* (Leicester).

———, ed. (1984). *The Transformation of English Provincial Towns* (London).

———, (1991). 'Changes in the Pattern of English Small Towns in the Early Modern Period', *Gründung und Bedeudung kleinerer Städte im nördlichen Europa der frühen Neuzeit*, hrsg.von Naczak, A. und Smout, C. (Wolfenbutteler Forschungen, Band 47).

———, ed. (1995a). *Small Towns in Early Modern Europe* (Cambridge).

———, (1995b). 'Small Towns in England 1550-1850 : National and Regional Population Trends', in Clark (1995a).

———, (2000). 'The European City Since The Middle Ages', Unpublished paper presented to the coference of the Keio Study Group in Urban Growth and Decline in Economic History.

(36) Wadsworth and Man (1931/65) ; Stobart (1996), pp.41, n.48, 46.

(37) Stobart (1996), p.46.

(38) Stobart (1996), p.47.

Clarkson, L.A. (1985). *Proto-Industrialization: The First Phaze of Industrialization?* (London)；鈴木健夫訳『プロト工業化——工業化の第一局面？——』（早稲田大学出版，1993年）.

Corfield, P.J. (1982). *The Impact of English Towns 1700-1800* (Oxford)；坂巻清・松塚俊三訳『イギリス都市の衝撃1700-1800年』（三嶺書房，1989年）.

de-Vries, J. (1984). *European Urbanization 1500-1800* (Cambridge. Mass.).

Daunton, M. (1978). 'Towns and Economic Growth in Eighteenth Century England', in Adams & Wrigley (1978).

Everitt, A. (1979/85). 'County, Country and Town: Patterns of Regional Evolution in England', *Transactions of the Royal Historical Society*, 5th ser., Vol. 29 ; later in Everitt (1985).

———, (1985). Landscape and Community in England.

Johnson, G. (1980). 'Rank Size Convexity and System Integration', *Economic Geography*, Vol.56.

Langton, J. (1979). *Geographical Change and Industrial Revolution: Coalmining in South West Lancashire 1590-1799* (Cambridge).

Robson, B. (1973). *Urban Growth: An Approach* (London).

Stobart, J. (1996). 'An Eighteenth-Century Urban Growth? Urban Growth in North-West England, 1664-1801', *Urban History*, Vol.23.

Wall, R. (1972). 'Mean Household Size in England from Printed Sources' in *Household and Family in Past Time*, ed., by Laslett, P and Wall, R. (Cambridge).

Wadsworth, A. P. and Mann, J. de L. (1931). *The Cotton Trade and Industrial Lancashire, 1600-1780* (Manchester; repr. 1965).

Walton, J. (1987). *Lancashire: A Social History* (Manchester).

Wrigley, E.A. (1985/90). 'Urban Growth and Agricultural Change: England and the Continent in the Early Modern Period', *Journal of Interdisciplinary History*; later in Borsay (1990).

———, (1987). *People, Cities and Wealth: The Transformation of Traditional Society* (Oxford).

Wrigley, E. A. and Schofield, R. S. (1981). *The Population History of England 1541-1871, a Reconstruction* (London).

酒田利夫（1994）.『イギリス都市史』（三嶺書房）.

———（1999a）.「近世イングランドにおける小都市の人口趨勢について（上）」（『青山国際政経論集』45号）.

———（1999b）.「近世イングランドにおける小都市の人口趨勢について（下）」（『青山国際政経論集』47号）.